

会員だより

粹人の名残りを感ずる

東京紹介

私が東京に行けばまさにお上りさん風情で、有頂天になっているところで、差し出がましく二ヶ所紹介します。

根津美術館

まずは根津美術館です。都会の真つただ中にあるのに、一步その領域に入ると、その静寂さとセンスの良さに自分の居る場所を忘れてしまう程です。実業家の初代根津嘉一郎の遺志によりコレクションを展示する為に昭和16年に一部私邸を提供して、開館した。現在では国宝7件・重要



根津美術館庭園

文化財87件など東洋の古美術品約7千4百件を収蔵していると言うから溜息がでる。特に有名なのは国宝・尾形光琳の燕

子花（かきつばた）図屏風で、2〜3年前、特別展示があり、庭園のカキツバタも美しかったのを思い出す。



美術館庭園石像

今回のテーマは「古美術の書の作品と書を書くための料紙鑑賞」であった。平安時代の伝小野道風や伝紀貫之・・・作品・国宝・無量義経などまさに教科書に出てくる作品が展示してある。料紙には雲母や・金銀砂・金箔などを使得って贅を凝らし、装飾技法を高め、芸術作品と賞し、貴族・茶人・豪商などに請われて、高野切・本阿弥切・・・切と分割されて現在に残っている。他室には日本はおろか東洋の古美術も展示していたがその収集センスに感嘆するばかりであった。美術館のガラス戸の外には自由に入出入り出来る一万七千㎡を超える緑豊かな庭園に接している。全く都会の喧騒が遮断された場所である。

武相荘

次に紹介するのは武相荘です。ダンディーという言葉で知られる白洲次郎氏（1902〜1985）とモダン近代女性の代表のような白洲正子さん（1910〜1992）が終の棲家とした、もと養蚕農家の民家である。次郎氏は芦屋の実業家の家に生れ、若くして英国ケンブリッジに留学中、実家が昭和恐慌のあおりで倒産し、帰国して、会社経営に乗り出した。



武相荘外観

正子さんは樺山伯爵の次女として東京に生まれ、学習院初等科卒業後、米國へ留学中、実家倒産で帰国。幼いころから能を習い、14歳で女性初の能舞台に立つ。19歳で白洲次郎氏と結婚。新婚旅行に次郎氏の父親からイタリアから輸入したランチアラムダが贈られたというから、想像のつかない

上流社会の人たちであつたろう。その家族が昭和18年、



茅葺屋根の上部は蚕部屋

日本の敗戦を見越して、当時辺鄙な田舎の町田市で養蚕民家を買取り、移り住んだ。原則改築をせず、原型をとどめるための手入れ

をしたので、今も近隣の様変わりする中、タイムスリップしたような風情を残している。武相荘とは地理的に武蔵と相模の境にあると言ふことから名づけられたが、次郎氏の「無愛想」という洒落もあるらしい。その次郎氏は戦前戦後の日本の経済・政治にもかかわる重要な役割を果たした。特に元首相吉田茂に請われて、GHQとの折衝にあたり、日本国憲法の成立に関わったが、吉田茂の政界引退後、政界入りすることわり、生涯在野で会社経営と趣味を貫いた。晩年までポルシェを

乗り回したのは有名。正子さんも能、文学、骨董、染織工芸、執筆などこの武相荘で活動した。次郎氏の葬式で無用、戒名不用「遺言通り、戒名無し」の二人の墓標が兵庫三田市の心月院にあるという。今回紹介した根津美術館も武相荘も共に名誉欲や所有欲に溺れず、本来の人間性を取り戻す事に努力した人達に東京の粹人の名残りを感ずる。改めてこの観輪のわが街紹介で本来の関西の良さを発見しようと思

記・写真：上村サト子

私の眼鏡は今

スリランカのどなたかのお役に！！

外国人が見たかつての日本人の印象は「眼鏡と首から下げたカメラ」と言われました。それ程日本人は眼鏡人口が多いのです。子供用から大人用へ、また近視用から遠視用にと幾つもの眼鏡が代わる人生。捨てればゴミですが、遠くスリランカに届けられ、必要とする人々のお役に立つとはなんと嬉しいことでしょう！

4月の総会に、日本・スリランカ友の会、関西事務局会長、藤井健三様がお見えになり、会の活動を詳しく報告してくださいました。尚一層感動し不要眼鏡の提供が多く（57個）あり第4回目の発送を致しました。この善意が益々広がりますようにご協力をお願い致します。

眼鏡協力担当 中川加奈子

